

平成20年度 農業環境技術研究所評議会 の開催

平成20年度独立行政法人農業環境技術研究所評議会が3月19日に農環研において開催されました。評議員のメンバーは以下の通りです。

[外部専門家・有識者] 大沼あゆみ (慶應義塾大学経済学部教授、欠席)、古在豊樹 (千葉大学環境健康フィールド科学センター教授)、三枝正彦 (豊橋技術科学大学先端農業・バイオリサーチセンター特任教授)、根本久 (埼玉県農林総合研究センター副所長)、松永和紀 (サイエンスライター)、山崎洋子 (NPO田舎のヒロインわくわくネットワーク理事長)、[関係研究機関・行政機関] 西郷正道 (農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課長、欠席)、大塚柳太郎 (国立環境研究所理事長)、堀江武 (農業・食品産業技術総合研究機構理事長、欠席)、鈴木和夫 (森林総合研究所理事長)、玉井恭一 (水産総合研究センター瀬戸内海区水産研究所長)

農環研理事長挨拶の後、前回評議会における指摘事項とその対応の報告、評議会における評価方法の決定、研究課題重点化点検の説明と質疑、農業環境技術研究所の平成20年度業務実績についての報告と質疑が行われました。評価の結果は、研究所の今後の運営の改

善、調査・研究の効率化・重点化に反映することとしております。最後に各評議員から講評をいただきました。主なものは以下です。

- ・領域横断的研究分野をカバーできる人材の育成や融合的プロジェクト研究の推進に力を入れて欲しい。
- ・2年後の3法人統合に向け、研究の方向性をより明確にすることを期待する。
- ・重要な研究を継続できる環境の維持を期待する。



(企画戦略室長 (現生物多様性研究領域長) 安田 耕司)

第25回 気象環境研究会 「開放系大気CO₂増加(FACE)実験 —過去、現在、未来—」

2月27日、(独)農業生物資源研究所の共催、(独)農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センターの後援により、標記の研究会を開催しました。1998年に岩手県雫石町で開始された世界初のイネFACE実験(雫石FACE)では、野外(開放系)で、大気CO₂濃度を人工的に高めた環境でイネを栽培することにより、将来の高CO₂濃度環境がイネや水田生態系に及ぼす影響について実証的な研究を行ってきました。雫石FACEでの実験が昨年までで一段落ついたことから、農業環境技術研究所はFACEによる新たな研究の展開をめざして、試験地をつくば周辺に移す準備を進めています。この機会に雫石FACEの研究を振り返るとともに、今後のFACE研究を議論する場として本研究会を開催し、115名の研究者やFACE関係者にご参加いただきました。まず、雫石FACEの生みの親である小林和彦氏(東京大学) [右写真]からイネFACE実験を開始するに至った経緯について、続いて岡田益己氏(岩手大学)から雫石FACE用に開発され、世界に普及したFACEのCO₂濃度制御技術について、ご講演いただきました。つぎに、雫石FACE

の成果に基づいて、高CO₂濃度環境が水稻の生理・生育・収量、水稻群落微気象、病害、植物の無機養分、土壤微生物、メタン放出・土壌炭素に及ぼす影響を、それぞれの専門家からご報告いただきました。「次期作物FACEへの期待」というテーマでの総合討論では、イネの遺伝子レベルでの研究や水田生態系の物質循環の研究との連携について、活発な議論がなされました。本研究会の議論を今後のFACE研究に活かしていきたいと考えております。



(大気環境研究領域 宮田 明・長谷川 利拡・酒井 英光)